

私は学生の頃、インド思想の虜になり、夢中で関連書物を読みあさっていた。そして次第に、インド・アリア語派に属する古典語のサンスクリット語で書かれた古代インドの文献を、翻訳者が生み出した翻訳書を通してではなく、原文で読んでみたいという欲求に駆られた。その後、留学し、バラモン教やヒンドゥー教、仏教の文献をサンスクリット語で学ぶという自身の願いをかなえる機会を得た。その一方で、私は約20年にわたり、天理教原典や教理書などのネパール語及びヒンディー語翻訳に従事している。翻訳書を軽んじていた私が、まさにその翻訳書を生み出す立場にいる。人生とはなんとも皮肉なものである。

さて、自身のこれまでの研究を振り返ると、インド思想を学ぶ動機が、単なる知的欲求から、天理教原典の翻訳に従事する過程で変化してきたように感じる。それは、インドやネパールにおいて、本教の伝道に資する翻訳作業を進めるうえで、当該地域の言語のみならず、ヒンドゥー教や仏教など、インド世界固有の伝統に培われた宗教や文化の重層的な理解が必要であり、その理解なしには、翻訳そのものが立ち行かないという事態に数多く直面したからである。つまり、原典の翻訳作業に携わることによって、サンスクリット語を介して古代インドの文献を研究する目的がより明確になっていった。私が天理教原典の翻訳に従事するということは、まさに、自身の中で天理教教理とインド思想が接触、衝突、等価を繰り返す、いわば内在的な異文化接触に絶えず晒されるというある種の緊張状態が続くことを意味する。伝道という使命を背負った翻訳、つまり、教えの実践的行為としての翻訳に携わっていたからこそ、悠久の歴史の中で培われた深遠なインド思想の大きなうねりに呑み込まれることなく、これまでインド文献学の研究を続けることができたのかもしれない。

翻訳は言葉と文化の橋渡しであり、単なる「単語の置き換え」ではない。それには、翻訳者による不断的努力によってもたらされた新しい意味的要素ともいべき創造的次元の展開が必要となる。新たな「解釈」による敷衍と原語に忠実な「訳語」の創造という、自由と責任の“はざま”で柔軟に学び、意味伝達を担う存在が翻訳者である。

伝道宗教の場合、異なった文化圏において布教伝道を進めるうえで、原典、教理書などの翻訳は必要不可欠であり、その認識のもとこれまで様々な宗教文献が翻訳されてきた。

本連載では、まず翻訳、特に伝道における翻訳の位置と可能性について検証を重ねたい。布教伝道の過程で、翻訳を介して教えがどのように受容され変容するのか。これは古くからある問題であり、伝道と翻訳の関係を考察するうえでは根本的な命題といえる。

ある言語から異なる言語にテキストを翻訳する場合、原語の持つ意味を正しく伝える語に置き換える「等価」は、翻訳者の責務といえよう。しかし、文化的、宗教的な背景を多分に有する言語間の相違を、翻訳者の才能と努力だけで補うには明らかに限界があるといえる。さらに、解釈者がどの地平に立って解

釈するかによって見えてくるものが違ってくる。ここに翻訳の困難性が存在する。翻訳によって特定の宗教的真理に基づいた教理の伝達が行なわれるとき、その言語間の差異や微妙な違和感を完全に拭い去ることはできないし、特定の伝統的価値観や理解に基づいた翻訳者と解釈者の時間的空間的地平の相違を克服することは容易ではない。つまり、翻訳を通して教理が受容されるとき、そこには常に変容の可能性があるといえる。

そこで、伝道と翻訳に関して様々な視点から考察を進めるうえで、インドで興った仏教が、陸路海路を経て、広くアジア地域に広まり世界宗教と呼ばれるに至った経緯を、仏教経典翻訳の歴史「訳経史」から紐解き、仏教の伝播において重要な役割を果たした漢訳仏典が、実際にどのように機能したのかを分析したい。

ヤスパースが後に枢軸時代と呼んだ紀元前5世紀頃、ガウタマ・シッダールタという一人の求道者からはじまった「教え」は、次第に北インドのガンジス川中流域一帯に広まり、多くの人々の心の拠り所となっていく。そして、彼が伝えた「教え」はその後、インド世界を出てシルクロードを経た後、アジア地域に広がりを見せ、仏教という世界宗教にまで発展した。その伝播の過程は、仏教の持つ教理概念や思想が、異なる文化との接触によって受容と変容を繰り返した歴史であったといっても過言ではない。もともとガウタマが伝えた「教え」は弟子たちに語り継がれ、地域的な広がりとともに多くの言語に翻訳されるようになっていった。インド世界を出たガウタマの「教え」は最終的には東アジアまで広がった。同じアジアとはいっても、全く異なった文化圏に受容される過程で仏教は変容していくことになる。つまり、言語、思想、伝統、習俗などが大きく異なる中国において仏教が次第に中国的な特徴を有するよう変容していった。仏教東漸の過程で、異なった文化圏において教理が翻訳を通じてどのように受容されたのか、そして、そこにどのような変容が起こったのかを「訳経史」から考察し、異文化伝道における翻訳の意義と、教理の受容と変容について理解を深めていきたい。

さらに、言語間の“はざま”で、自身の信仰実践として翻訳に生涯を捧げた「訳経僧」と呼ばれる翻訳者の存在と、彼らの翻訳論にも注目したい。約千年にわたり、数多くの訳経僧が仏典の漢訳に全霊を傾倒し、仏教の移植という一大事業に取り組んだ。彼らにとっての翻訳行為は、まさに信仰者としての究極的な自己措定であったといえよう。結果的に外来の宗教であった仏教は中国で受容された。その歴史には訳経僧の叡智が刻まれている。訳経史はこれまで仏教学者によって研究され、仏典研究の礎となってきた。多くの碩学によるこれまでの研究成果を踏まえつつ、本連載では新たに異文化伝道の視点からこの訳経史を捉えなおしたい。

そのうえで、自身がこれまで携わってきたネパール語及びヒンディー語の原典翻訳の現場から具体的な事例を取り上げて検証し、本教の伝道と翻訳に関する理解を深めたい。先学のご指南とご批判を乞いつつ、本連載が原典翻訳に関する諸問題解決の一助となれば幸いである。